

●高澤良一 第五句集 鳩信

●東帝

下曾我流鏑馬の梅皚々の方十里

干蒲団富士の白妙差しにけり

流鏑馬の馬首めぐらすに冠雪富士

永日の馬体に鞭を一の射手

べべん橋本かたくりの里べんべんと堅香子反り返り

つんのめり咲きのかたくり風受けて

控え目になほ控え目に花かたかご

かたくりの花のまだ咲く鄙曇り

かたくりの花のむつつり右衛門かな

かたくりの花の貧乏揺すりして

控へ下諏訪御柱祭をる秋宮一之御柱

御柱落とす地点へ白き蝶

山風に木遣り起こりて木落とし坂

坂上の空へせり出す御柱

落とさんと諏訪の春宮二之柱

元綱に小綱を掛けて木落とし衆

木落としはまばたき一つする間

宿毎に伊那路のさくら愛でゆくも

花高遠花祭りに浮かれ来たる奴に高遠城

藩校の教場抜けて花の風

永日絵島困屋敷の一机据えあり絵島の間

庭木芽吹く頃となりをり下女詰所

行水所コヒガンザクラ明りして

長官横須賀安浦 旧鎮守府長官官舎愛づ櫻なりきと顎引く

鎮守府の櫻の上に海展け

永日の欠伸百度して待たされ

造影剤かつと胸板焼く暮春

採血の血管選れり目借時

一滴の雨にも遇はず初ざくら

なかなかの櫻と幹に手を掛けて

一雨に花崩れたり北の丸

鶉飛来花散るからに散るからに

怪童の腕かいなのやうなさくらの枝

真っ白な花に群がる風一目

満開の心を一に濠桜

只管になること落花には如かず

夫婦して見にゆくさくらありにけり

夜桜に誘ってみてはと付け足せり

戻りてさくらに彩の戻るなり

山櫻さう山櫻葉の臙脂

夜桜にしこたま冷えて戻りけり

四月馬鹿達者と云へる褒め言葉

ぼうたんの匂ひ薄める風立ちぬ

緋牡丹の錯乱状態つづくなり

筍は口を噤んで掘るべかり

亀鳴かす程でなくともこの俳味

目借時沽券てふ字が書けなくて

浅春の闇のとりもつ睡りかな

連れ合いの渾名呼ばるゝ牡丹寺

それはそれで趣ありぬ霞草

咲きさうな処に咲きぬ三味線草

がつくりと見せ場つくりぬ緋の牡丹

頭亀戸天神の中に藤の暗がり垂れ込めぬ

越天樂奏づるごとく下り藤

藤棚の暗部雫を零しけり

花房を伝ひて微光下り藤

亀戸の煎り豆本舗藤の雨

黄旧古河庭園の似合ふ薔薇の名札はオクラホマ

蟹金澤八景 野島海岸と岩を起こして蟹捕る子

干潟踏みすつくと健康さうな脚

抛り投ぐ潮吹潮吹にぞ当る

舟虫の俗気さらなる俗気呼ぶ

やぶからし最初考え違ひして

浦島草蕭白好みの画材にて

トラ鱧の薄茶の縞の涼しさう

車輪梅海匂ふとき匂はぬとき

夏みかんの花の匂ひを風薄め

接吻といふ語思へりかたばみに

常夏大船植物園のウツボカズラのサキソホン

薔薇の赤き棘も美観の一つにて

観音陽谷山 龍寶寺は空に存すや桐の花

はつなつの砂場のままごと遊びかな

桐描くには水彩に如くはなし

桐の花入れて一景仕上げけり

桐咲いてやうやく空がおちつきぬ

桐の花程よき距離に立ちてみる

竹秋の竹林鳴動して止まず

雑草あらくさに掴まり立ちのやぶからし

泰山木落葉木片降る如く

山女魚らの口肥えて来ぬ青葉どき
花了り椽うつさうとして来たり
女貞咲かせこの家地味も地味
椎の香のこれぞてふ香に立ち止る
馬刀貝の素っ頓狂を鷺掴み
謡は能六浦なむ青葉楓の面目を
ひまは小机城周辺りを十本植うは晴れがまし
口つぐむ百合に魂胆あるごとし
蓄む百合あうむ返しをせる如し
ニス塗りし如くに百合の蒼かな
朝風は川崎 妙楽寺から東高根森林公園へ平らに吹いて額の花
枇杷の木にだらだら雨の生まれり
聞き来し道わからなくなり立葵
あぢさゐの雨の葉っぱのにほひかな
六月の鴉どすんと樹頭に降り
柵の中蚩袋の変電所
立葵てふてふ道草喰つてをり
かがんぼの雨やり過ぎす葉裏かな
索性よき樹木といはむ花水木
伽羅路をつまむ箸もて「例のほら」
大緑陰鳩・人・蜥蜴憩はしめ
棕櫚の花はらはら零れカステラも
梅雨空の突っかえ棒の外れ月
さみだるゝ尿道造影剤検査
はつなつの尿を所望す泌尿器科
床ずれのはつかに在りぬ更衣
養生してひととせ経つか枇杷色づく

なうなうと止まるこの蠅不埒なり
硝子器に箸の当りて夏の音
あぢさゐが咲いて清潔無比の園
あめふらし遊びあかして磯日暮れ
蹴返せばはらほろひれと馬陸かな
石榴散り振袖火事の火の粉めく
どむみりと大山入れて植田水
白菖蒲蓄きりきり鋤めく
泥運尊徳生地ぶ燕律儀に栢山村
あぢさゐにはやりすたりの色ありし
山峡の風に黄ばみて余り苗
すかし百合ちらほら見ゆる御殿場線
みるからに元気のかたまり水馬
朝は朝の智が働いて朴の花
心臓にも運動療法青き踏む
ざりがにのそっくり返るはこけおどし
ダダ三浦半島 妙音寺ダツと山百合咲いてなだれけり
半島の空をテッペンカケタカと
涼魯山人展しさは染めつけ鯰向付
筍は何處にでも出る度し難し